



豊中市 芳村 幸司 さん

特定非営利活動法人ラブとよネット代表理事。「豊中まつり実行委員会」顧問。1996年の豊中まつり検討委員会より豊中まつりに関わり、2001年から2017年まで実行委員長を務める。

豊中市 林 史洋 さん

豊中市都市活力部魅力文化創造課長。2004年に豊中市に入庁し、子育て支援課、地域教育振興課、行政総務課などを経て、2023年度より豊中まつりの担当課である魅力文化創造課長を務める。



沖縄市 照屋 幹夫 さん

特定非営利活動法人まちづくりNPOコザまち社中理事長。27年にわたる沖縄市役所での勤務を経て、同法人を設立。「文化が人を育み 人がまちを創造する」という活動理念のもと、まちづくりに尽力している。

沖縄市 金城 諭 さん

一般社団法人沖縄市観光物産振興協会事務局長。名桜大学観光産業学科卒、現在まで一貫して沖縄市観光物産振興協会に従事。KOZAフィルムオフィスを立ち上げフィルムツーリズムの推進なども行う。

【司会進行】田中逸郎(元・豊中市副市長)



第1部

歩みを振り返り、
未来を考える。

それぞれの“出会い”

—— 皆さん、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。司会進行を務めます豊中市の田中逸郎です。どうぞよろしくお願いいたします。

みんな“兄弟”の間柄ではありますが、まずはお一人ずつご紹介かたがた、私から質問させていただきます。

トップバッターは「特定非営利活動法人まちづくりNPOコザまち社中」理事長の照屋幹夫さん。沖縄市役所にお勤めでしたが一念発起、コザのまちづくりを目的としたNPO法人を2008年(平成20年)に設立されました。豊中市との交流にもご尽力くださっていますが、そのきっかけを改めて教えてください。

照屋 私が豊中市を知ったのは、沖縄市職員時代の先進地視察です。まさに一歩も二歩も先を進んでおられる豊中行政を目の当たりにして、大変驚いたことを覚えています。

交流のきっかけとしては、「あしびな一歌舞団」を豊

中まつりに派遣するという業務に携わったことです。かじ取りを市民の手に委ねた新しい豊中まつりの始まりのときで、その大改革にまた驚かされました。以降、まつりにはもう10回くらい遊びに行っています(笑)。

—— ウチナーグチ(沖縄の言葉)で「遊びの庭」という意味のあしびな一歌舞団、新生・豊中まつりを大いに盛り上げていただきました。ありがとうございます。

続いて、「一般社団法人沖縄市観光物産振興協会」事務局長の金城諭さん。沖縄市の観光や物産をはじめ、産業、文化、芸術、スポーツといった多彩な魅力をさまざまな形で発信しておられ、豊中まつりにもご協力いただいています。その経緯をご紹介します。

金城 僕が協会に入ったのは26年前の1998年(平成10年)、ちょうど両市の子どもたちのサッカーチームによる交流がスタートした年で、それが僕にとっても“兄弟”との交流の始まりでした。それ以降も継続的に、兄弟都市提携の周年行事などで親睦を深め、豊中まつりにも参加させていただく関係になりました。そんな中でいつも思うことは、豊中市の皆さんの沖縄市に対する愛情

がすごく熱い。その愛に僕はちゃんと応えられているだろうか、と(笑)。

—— 豊中市の個性的なメンバーたちの愛の“むちゃぶり”をいつも全身で受け止めていただき、ありがとうございます(笑)。

ところで、沖縄市は山形県米沢市や愛知県東海市と姉妹都市であり、東京都町田市とも友好都市提



照屋さん、金城さんがまちづくり・振興をはかるコザの中心地(コザ・ミュージックタウン)

携を結んでおられますが、豊中市を含めて、それぞれの地域性や交流の形はどのように違いますか。

金城 沖縄は「いちゃりばちよーでー」出会えば兄弟ですが、豊中の方々はいきなり友達というか、行政も民間も関係なく、とても気さくに接してくださるので、他のところとはちょっと違います（笑）。

—— 熱いと厚かましいは紙一重ですね（笑）。

それでは、次にヤマトンチュのメンバーにお尋ねしましょう。

一級建築士、福祉住環境コーディネーター、豊中青年会議所の元委員長、そして豊中まつり実行委員会顧問と、数々の肩書を持つ芳村幸司さん。兄弟都市交流を市民の立場から実践してこられました。芳村さん、そのいきさつを教えてください。

芳村 豊中JC（青年会議所）の委員長を務めていたのがそもそもの始まりです。行政主体で行われていた恒例の夏まつりを市民主体のまつりに変えるということで、官民一体となった見直し検討委員会が1996年（平成8年）にありまして、そこへJCの代表として参加し、「おっ、なんかおもしろい」と思っているうちに気づけば30年近く。いつの間にか、まつりの実行委員長にも祭り上げられていました（笑）。

その間、沖縄市の皆さんには本当にお世話になり、むちゃぶりもしたし、アホなことをいって怒られもしたし、泡盛を飲んでカチャーシーも踊ったし、熱く交流してきました。でも、だからこそ本当に兄弟のような固い絆が生まれたのだと思います。

—— その見直し検討委員会には私も参加していました。芳村さんは「市民主体のまつりをするのなら、市民が責任を取れる組織をつくらあかん」という思いから、2012年（平成24年）に「ラブとよネット」というNPO法人も立ち上げています。

また、兄弟都市提携40周年のときには、行政の記念事業とは別に、市民による交流事業を企画し実施されました。何か苦労話などはありますか。

芳村 何も（笑）。せっかくの40周年だから沖縄市の人たちが一番喜ぶことを、そして自分たちも楽しいこ

とをやろうという話に自然となり、豊中市民を100人ほど連れて沖縄市へ行って、みんなでワイワイ楽しんだだけですから。

—— 行政主導ではなく、芳村さんを中心として両市の市民間交流が生まれたことに意味があります。振り返れば、兄弟都市の歩みにおける一つの画期的な出来事だったと私は思います。

そういえば、県内最大級イベントの「沖縄全島エイサーまつり」で、なぜか芳村さんが屋台でタコヤキを焼いていたじゃないですか。あれはまた一体どうして（笑）。

芳村 見ちゃいられなかったんです、実家がタコヤキ屋だったので。私は来賓として招待されていて、屋台はJCの若い子たちが運営するはずだったのですが、彼らの仕込みやなんかを見ているうちに「ええい貸せ、もう俺が焼く!」と（笑）。



市民交流ツアー客も参加した市民大交流会（2014年11月8日）

—— VIPの大きな花を胸に付けたまま焼いていましたね（笑）。

さて、市民の代表である芳村さんにいろいろとお尋ねしましたが、最後は豊中市魅力文化創造課長の林史洋さん。両市交流の事務局を担当なさっていますが、それ以前から、市職員としてではなく市民ボランティアとして豊中まつりに関わっておられます。林さん、そのきっかけはなんだったのですか。

林 今からちょうど20年前、2004年（平成16年）に市役所へ入職しました。その時の上司が、兄弟都市交流事業では必ず名前が挙がる本岡和巳さんです。豊中まつりや市の野球部の活動を通して沖縄の方々と親しくしておられて、その影響を色濃く受けてしまったわけです。後に異動した教育委員会でもなぜか豊中まつりの担当になり、スタッフ名簿の肩書きはいつの間にか「市民ボランティア」になっていました。林は好きで手伝っているんだから、と（笑）。

—— 好きだからやっている、楽しいから続けている、すてきなことです。

林 はい。今回のこの50周年記念事業の準備で、昨年久しぶりに沖縄市へまいりました。兄弟都市の歩みや沖縄市の歴史などを関係者の方々から改めて教えていただき、まだまだ知らないことが、学ぶべきことがたくさんあると感じ入った次第です。

—— おっしゃる通り、沖縄市は訪れるたびに新しい発見や出会いがありますね。

“兄弟”のこれから

—— さて、ここからは皆さん自由に発言していただきましょう。兄弟都市提携50周年を迎えて今、思うこと、感じること、提言、苦言、放言、何でも結構です。

照屋 では私から。沖縄市は戦中戦後を通して隣国の台湾とも深いつながりがあります。近年は台湾の子どもたちが修学旅行で沖縄市にやってきました、両市の子どもたちが音楽を通じて交流するイベントを開催したりしています。台湾の人たちは大阪が大好きですから、豊中市とも交流できないだろうか、沖縄市と台湾と豊中市のつながりをつくれなだろうか、と実は前々から考えていたのですが、どう思われますか。

—— 豊中市と沖縄市という二つの都市の絆がきっかけとなり、新たな国や都市と結ばれて、人と人とがつながり、交流の輪がさらに広がる。異文化理解、多



文化共生、そして共通項は平和への思い。素晴らしいご提案だと思います。

金城 兄弟都市の交流を今後も長く続けていくためには、若い人たちの参加が不可欠だと感じています。子どもたちはスポーツや音楽を通じて両市を行き来していますけれど、もっと幅広い世代が参加できるよう、文化や芸能といったさまざまな分野で交流できる仕組みをつくれれば、より強い絆が生まれると思います。その絆が、照屋さんがおっしゃるように他の国や都市とつながれば、さらに楽しいですよ。



小学生サッカー交流（2024年3月、沖縄市）

—— つまり、隙間のない世代間交流を構築することですね。そして両市の絆が世代も国境も超えてさらに広がれば、それは都市提携の新しい形となるかもしれません。

金城 沖縄市観光物産振興協会では豊中市の修学旅行生を受け入れていますけれど、逆に沖縄市の修学旅行生を豊中市が受け入れていただければ、

また新たな世代間の交流が生まれると思うのですが、どうでしょう。



コザのまちあるきを体験する豊中市修学旅行生（第七中学校）

—— 両市交流の事務局を担当なさっている林さん、どうでしょう。

林 豊中市は住宅都市でして、実は史跡や文化財は数多く点在しているのですが、沖縄市さんのような観光資源は乏しいのが現状です。ただし、広域へのアクセスは抜群です。電車、モノレール、バスといった公共交通機関、高速道路や国道など充実した道路網、そして空港。ですから、いわばハブ的な都市と



大阪国際空港に着陸する飛行機の様子（千里川土手）

して、豊中市を拠点に関西の各方面を巡っていたくという形であれば、私見ですが実現可能だと思います。

—— なるほど、いいかもしれませんね。両市の今後について、芳村さんはいかがですか。

芳村 私も、兄弟都市の未来は若い世代に託したいと思っています。豊中まつりやラブとよネットでいえば、次代の担い手が育ってきています。ただ、私たちが築いてきたネットワークをそのまま引き継ぐのではなく、広げていってもらい必要があると考えています。新たなつながりをつくるということですね。それが今後の課題であり、また楽しみでもあります。

—— 継承と、さらなる発展をめざすということですね。それは両市の交流に限らず、自治体の課題であり目標でもあります。沖縄市は今年、市制施行50周年を迎えられました。先人が培ったチャンプルー文化を、いわば第二世代である照屋さんたちが受け継いで昇華させ、そしてまた第三世代へと受け継がれていくわけですが、照屋さんはどのようにお考えですか。

照屋 おっしゃる通り、先輩たちから受け取ったバトンの後輩たちに手渡すときが来ています。僕たちのところも若い世代が育ってきていますから、これからが楽しみです。

—— 両市の今後や次の世代について、林さんはいかがですか。

林 私も入職当時の上司である本岡さんから兄弟都市交流の素晴らしさを教わり、今こうして50周年の節目にも関わらせていただいていますので、この絆を大切に守りながら、次世代に伝えていくことが私の役目だと思っています。

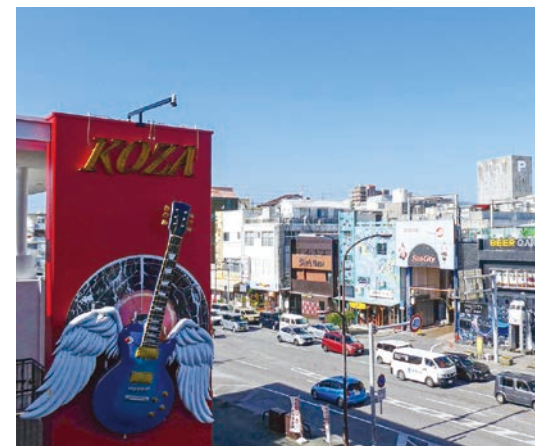
そんな中、昨年度から両市の職員交流がスタートしました。豊中市から沖縄市へ、沖縄市から豊中市へ、互いに若手職員1名が出向しています。

—— 新しい時代はもう始まっていますね。若い人たちが、さらに大きな交流の輪をつくってくれることでしょう。

ここが好きだ！ここが嫌だ！

—— それでは最後のテーマです。兄弟都市のここが好きだ！ここが嫌だ！さあ、順番にどうぞ。

芳村 何時になっても店が開いていて、夜の11時だというのに人が集まってきて、みんな泡盛が大好きで、電車がいないので終電を理由に帰ることもできず、もう60歳を超えているので正直しんどいです（笑）。まあ冗談はさておき、沖縄市はいろんな意味でディープだと私は思っていて、基地の門前町としての歴史があるからなのか、まさに独特の重み、深みを感じます。うまくいえませんが、多様な表情やたたずまいが一つのまちに共存しているような気がして、そこがとても魅力的です。



米軍基地につながる沖縄市「ゲート通り」

林 沖縄市の方々とお会いすると、あっという間に時間が過ぎてしまい、美しい海を見ることもなく帰ってくることがしばしばですが、訪れるたび好きになります。自然もまちも人も、沖縄市にしかない魅力にあふれています。去年は3回行って「行きすぎちゃうか」と言われることもありましたが、私はまた行くでしょう（笑）。

—— 青い空と海、島唄やエイサーをはじめとする芸能文化、おいしい料理と泡盛、コザンチュの温かい心、そして基地とそれにつながる歴史。全て沖縄にし

かないものです。今日は基地問題などには言及しませんが、そうした一言では語り尽くせない、まさにチャンプルーな魅力、単なる観光都市ではない独特の深み、それが沖縄市なのだというお二人のご意見です。私もまったくその通りだと感じます。

さあ、次は沖縄市さん、どうぞ。

金城 豊中市の嫌なところは、暑すぎるところ！豊中まつりが開催される8月なんて沖縄より暑いですから。そして、その暑さに負けないくらい豊中の方たちの気持ちも熱い！そっちの熱いは大好きです（笑）。皆さん个性的で楽しくて魅力的で、先ほど観光資源が乏しいというお話がありましたけれど、豊中の皆さんが観光資源じゃないかなと僕は思っています。

—— 豊中は人が資源——とてもうれしいお言葉ですね、ありがとうございます。

照屋 豊中市さんのことは兄弟の兄貴分だと思っています。行政の在り方にしても、市民との関わり方にしても先進的で、計画性がある、安定感を感じます。計画して行動するなんて、コザンチュが一番苦手なことかもしれません。昔も今も学ぶべきところがたくさんあります。

—— ありがとうございます。私たちも沖縄市の皆さんから多くのことを学んでいますよ。さて、それでは第1部の締めくりに、皆さん一言ずつお願いいたします。

芳村 これからのことは若手に任せました。兄弟の皆さん、思い切り遊びましょう！

林 役人ですから異動は避けて通れませんが、どこへ行こうとも、市民ボランティアとして頑張ります！

金城 もっともっと熱い兄弟愛で応えます！

照屋 継続は力なり。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

—— こちらこそ、どうぞよろしくお願いいたします。